

1. 改正についての経緯と趣旨

全日本剣道連盟居合は昭和44年に制定され居合道の普及発展に大きな役割を果たしてきました。

全剣連居合は当初、主として剣道家の居合道入門編として「古流と切り離れた独立した居合道形」として制定されました。しかしながら、作法や下げ緒の結束法、納刀等に古流の技法が残されていることから流派、指導者によって所作に違いを生じるという制定当初からの課題については、歴代の居合道委員会で議論するも結論に至らず今日に至っております。

一方で、数百年間伝わってきた居合の教えは古流にあり、居合道をより深く学ぶためには古流の修練が不可欠です。全剣連居合（解説）の序文にも、「居合の技および応用は多岐に亘り、また奥深い精神的な面もあるので、多少とも居合道を窮めようとされる方は、全剣連居合にとどまることなく古来の流派も併せて研修が必要である」とあるように、特に中級者（五・四段）以上にとって全剣連居合と古流の修練は車の両輪であり、全剣連居合の修練と共に、古流のより一層の研鑽をお願いいたします。

本年度の中央・東日本/西日本地区講習会におきまして、全剣連居合（解説）の主要な改正点の方向性を予め共有させて頂き、正式に決定しましたら何らかの形で改正内容、施行日等周知させて頂きます。先ずは、全剣連居合改正の趣旨についてご理解をお願いいたします。改正内容の一部は「指導上の留意点」とリンクする部分もありますので、本講習会において「指導上の留意点」のご理解と修練をお願いいたします。

2. 主な改正点作法

(五) 始めの刀礼

1. 着座

『「携刀姿勢」から左足を引いて、右手で左足の「袴捌き」を行って左つま先を立て左膝を床につける。右足を引いて左右の膝頭をそろえる。つま先を伸ばして親指を揃え、腰を静かに下ろして落ち着けながら、右手は指を軽くのばして右腿上に置くと同時に、左手は刀を持ったままいったん左腿上に置く。』

1本目から四本目までの座技についても同様に、左足を引いてから着座する。

(六) 帯刀

『下げ緒を結び』とあるが、三、補足（九）下げ緒 に『場合によっては省略することもできる。』とあるように、全剣連主催の六段以上の昇段審査会、全日本居合道大会、中央・地区講習会においては、下げ緒の着用は省略する。

(七) 終りの刀礼

終わりの刀礼は始めの刀礼と同一にする。

1. 脱刀

『帯刀した「正座の姿勢」から、左手親指を鐙にかけて残りの四指で鯉口近くを握り、刀をわずか右前腿の上におくり出しながら右手は左手の下側におくる。右肘を伸ばしながら左手は鞆をしごくようにし

て「鑑」から拳一つ余すところまでおくり刃が正面に向くように脱刀する。』

2. 刀の置き方と座礼

『「(五) 刀礼、(2) 刀の置き方」にならい、刃を正面に向けたまま、柄を右、「鑑」を左にし、「鑑」が神座に向かないようにやや手前になるように刀を正面床上に横たえる。』

3. 刀のとり方

(六) 帯刀の時と同じように『両手を伸ばして刀を取り、両手で刀を左脇後方へ引いて左腿上に置く。』

1) 補足

(八) 柄の握り方

『右手は鰐元近く、人差し指が縁金にかからないようにして握り』

※追加 座技を立ち技とする場合

『様々な要因で正座もしくは居合膝で座れない場合、座技を立ち技として行っても良いこととする。その場合、足捌きについては詳細を定めず、上体のみ座技と同じとする。『審判・審査上の着眼点』についても、足捌きに関する点は適用しないものとする。』

※追加 納刀

納刀については、『二、術技 (一) 一本目 前 4. 注 (1)』に納刀の方法について説明があり、これに、『刀の角度について、刃先が左斜め上方に向けるようにして行う。』を追加する。

2) 全日本剣道連盟居合審判・審査上の着眼点

改正された全剣連居合（解説）と『審判・審査上の着眼点』に齟齬がないように一部を見直します。

以上